

インフルエンザ罹患に伴う 異常行動研究

2010年3月31日までのデータ取りまとめ

2009/2010シーズン報告

平成21年度厚生労働科学研究費補助金

医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

「インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動の情報収集に関する研究」

研究代表者 国立感染症研究所 岡部信彦

研究班

研究代表者

- 岡部信彦（国立感染症研究所感染症情報センター長）

研究分担者（五十音順）

- 大日康史（国立感染症研究所感染症情報センター主任研究官）
- 谷口清州（国立感染症研究所感染症情報センター第一室室長）
- 宮崎千明（福岡市立西部療育センター長）
- 桃井真里子（自治医科大学小児科学教授）

報告の内容

- インフルエンザ2009／2010シーズン
- 調査概要
- 重度の分析
- まとめ

インフルエンザ
2009 / 2010シーズン

図1. インフルエンザ患者報告数

図1. インフルエンザの年別・週別発生状況(2000～2010年第10週)

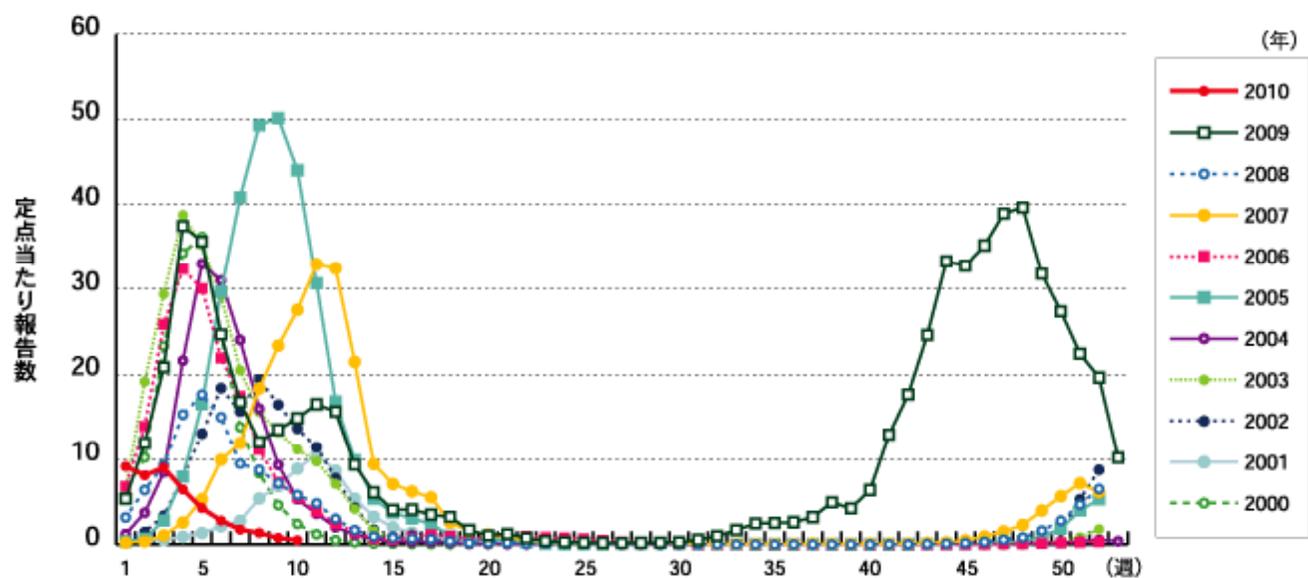


図2.年齢別インフルエンザ患者報告数

図4. インフルエンザ推計受診患者数(暫定値)の年齢群別割合(2009年第28週～2010年第10週)

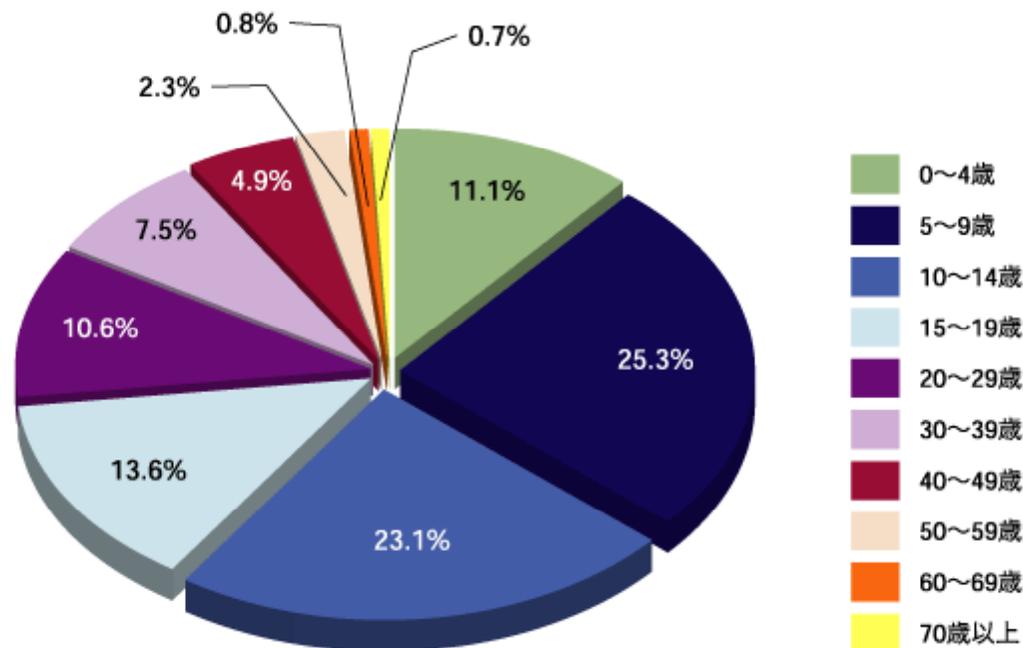
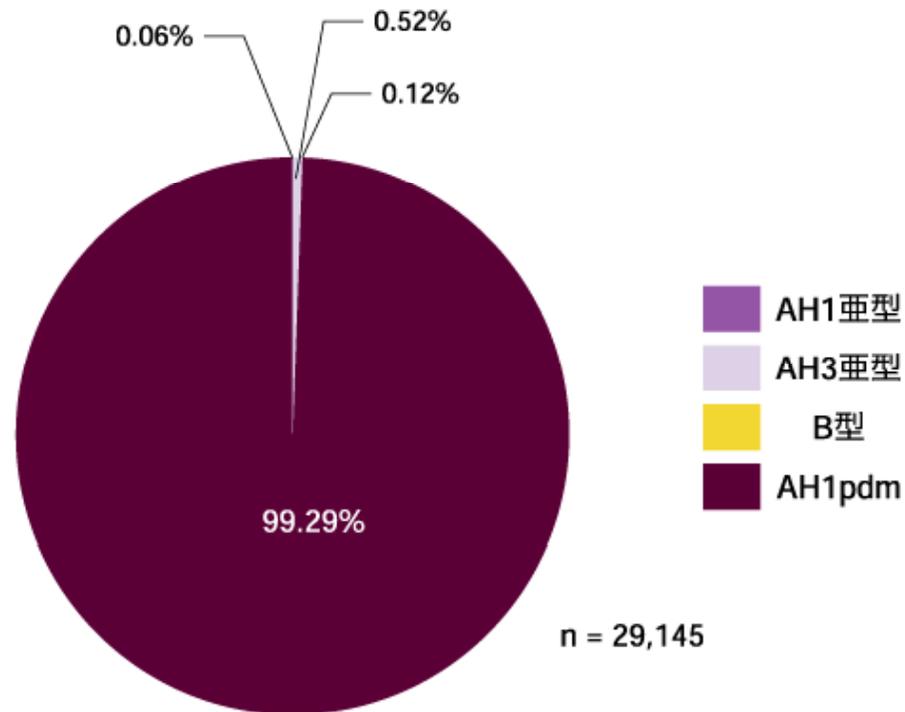


図3. 型別インフルエンザウイルス 分離の検出報告数

図9. インフルエンザウイルス検出報告割合(2009年第28週～2010年第10週)
(病原微生物検出情報: 2010年3月18日現在報告数)



調查概要

調査概要

- 重度の異常な行動に関する調査（重度調査）
 - すべての医療機関
 - 2006／2007シーズン：後向き調査
 - 2007／2008シーズン：前向き調査
 - 2008／2009シーズン：前向き調査
 - 2009／2010シーズン：前向き調査 : 9月25日～
- 軽度の異常な行動に関する調査（軽度調査）
 - インフルエンザ定点医療機関
 - 2007／2008シーズン：前向き調査
 - 2008／2009シーズン：前向き調査
 - 2009／2010シーズン：前向き調査

調査概要（重度）

- 調査依頼対象：すべての医療機関
- 報告対象：インフルエンザ様疾患と診断され、かつ、重度の異常な行動※を示した患者
 - ※飛び降り、急に走り出すなど、制止しなければ生命に影響が及ぶ可能性のある行動
- 報告方法：インターネット 又は FAX

インフルエンザに伴う異常な行動に関する報告基準

- インフルエンザ様疾患と診断され、かつ、重度の異常な行動を示した患者
- インフルエンザ様疾患
 - 臨床的特徴（上気道炎症状に加えて、突然の高熱、全身倦怠感、頭痛、筋肉痛を伴うこと）を有しており、症状や所見からインフルエンザと疑われる者のうち、下記のいずれかに該当する者
 - 次のすべての症状を満たす者①突然の発現、②高熱（38℃以上）、③上気道炎症状、④全身倦怠感等の全身症状
 - 迅速診断キットで陽性であった者
- 重度の異常な行動
 - 突然走り出す
 - 飛び降り
 - その他、予期できない行動であって、制止しなければ生命に影響が及ぶ可能性のある行動

重度の分析

図4.異常行動（重度）の発熱週と発生動向調査

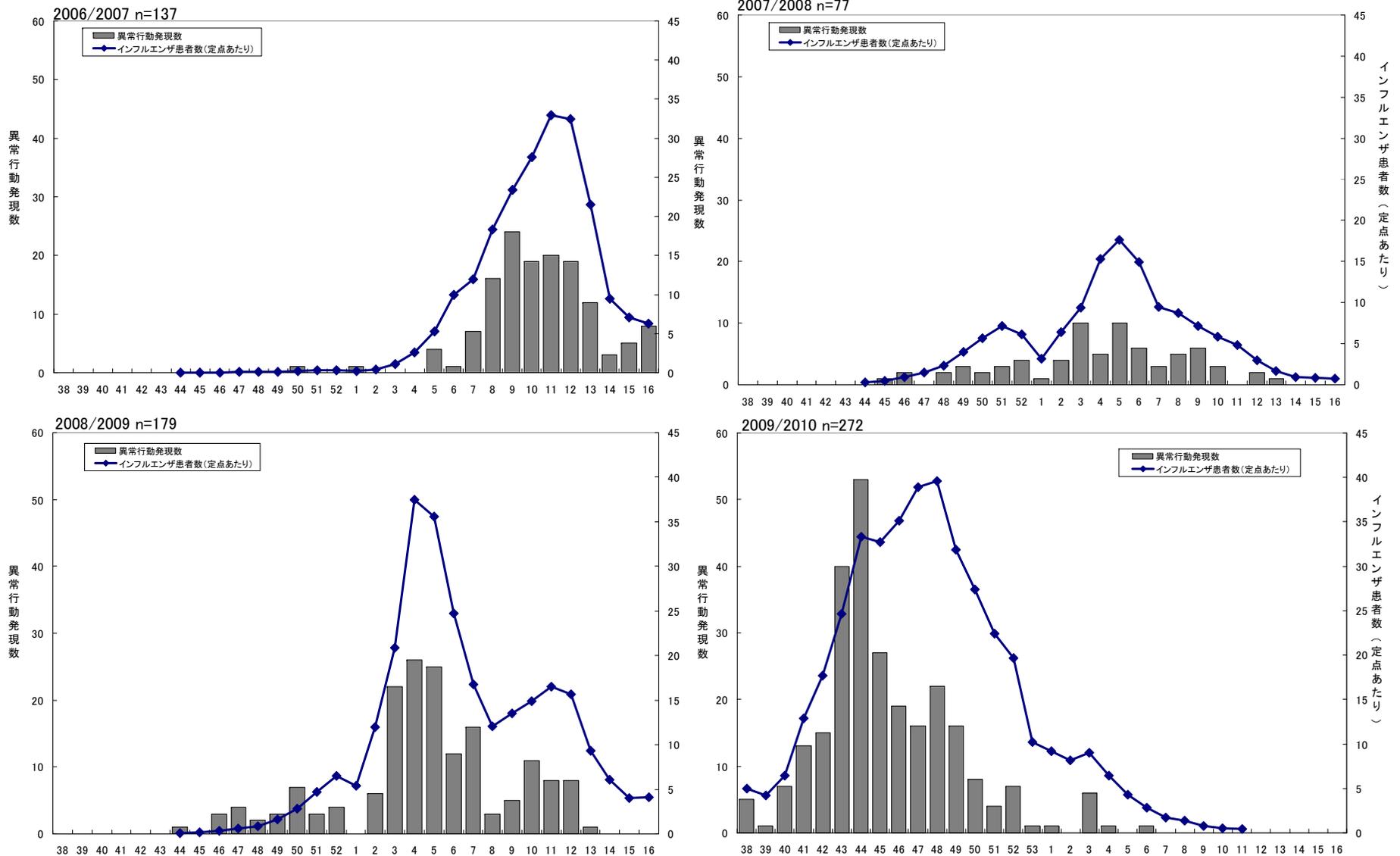


図5. 患者の年齢

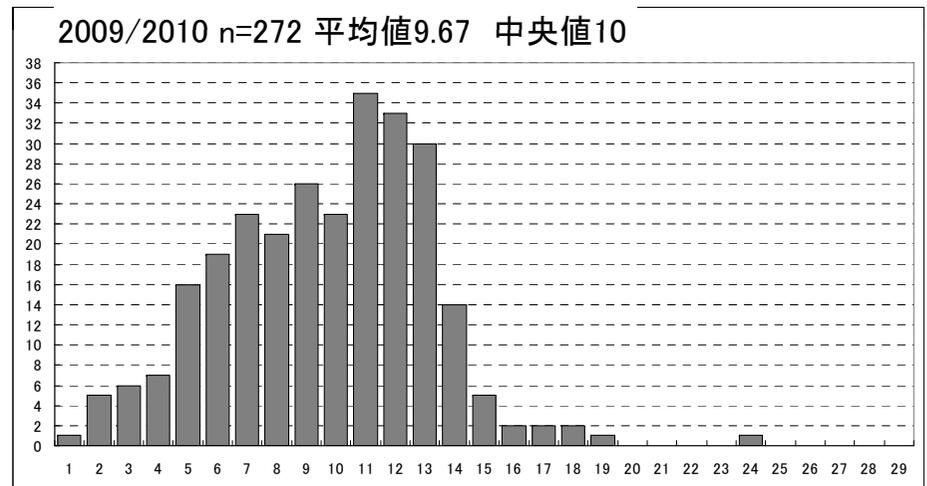
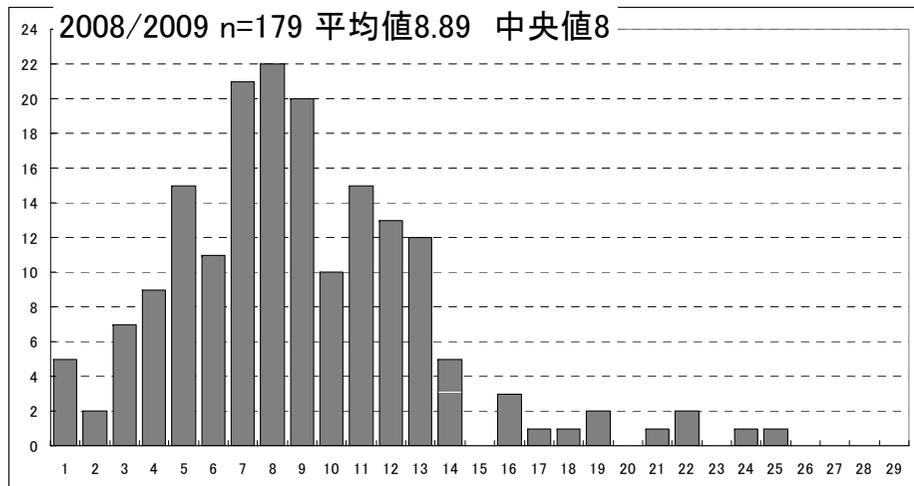
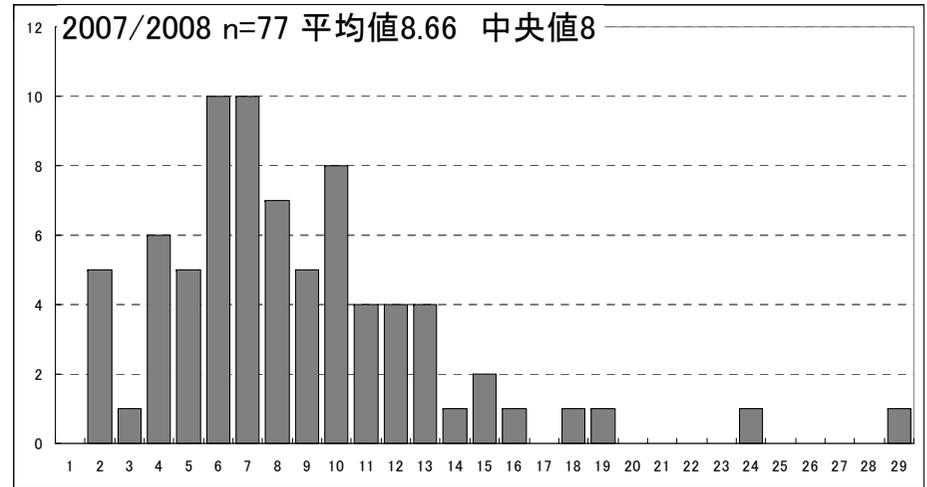
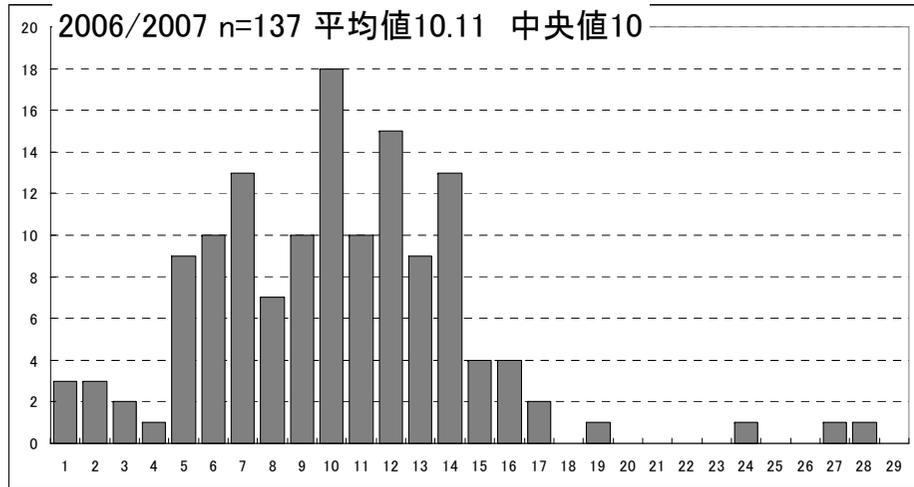


図6.患者の性別

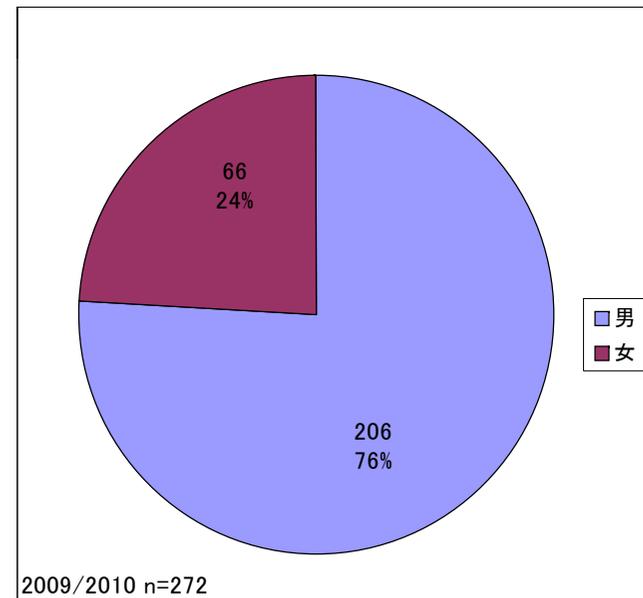
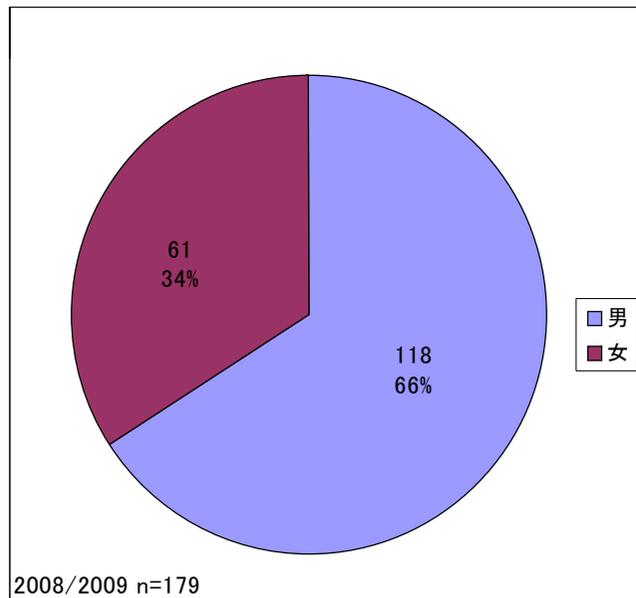
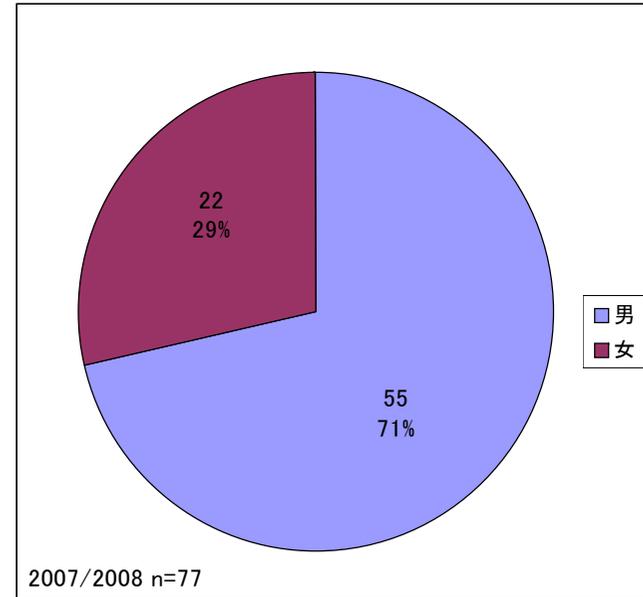
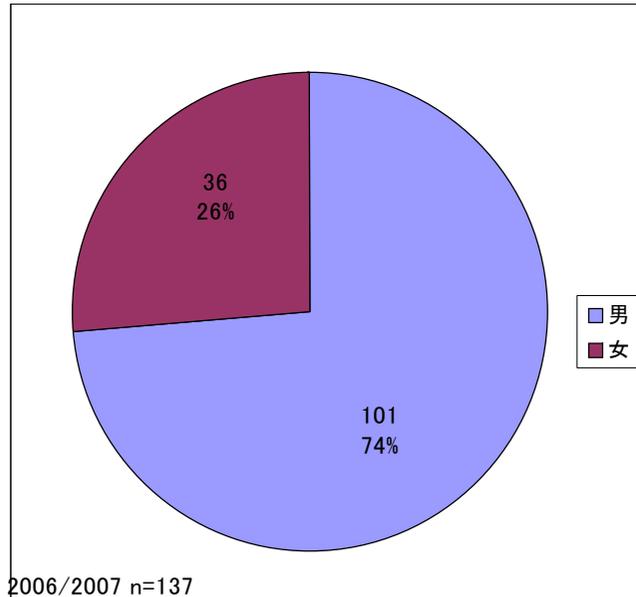


表1.発熱から異常行動発現までの
日数

発現日	重度		走り出し、飛び降りのみ	
	n	%	n	%
発熱後1日以内	66	24.72	33	23.70
2日目	151	56.55	75	55.56
3日目	42	15.73	24	17.78
4日目	8	2.00	4	2.00
	267	100	136	100

(2009／2010)

表2.発熱から異常行動発現までの
日数

発現日	重度		走り出し、飛び降りのみ	
	n	%	n	%
発熱後1日以内	47	27.01	24	28.57
2日目	87	50.57	45	53.57
3日目	22	12.64	9	10.71
4日目以降	17	9.76	6	7.15
	173	100	84	100

(2008／2009)

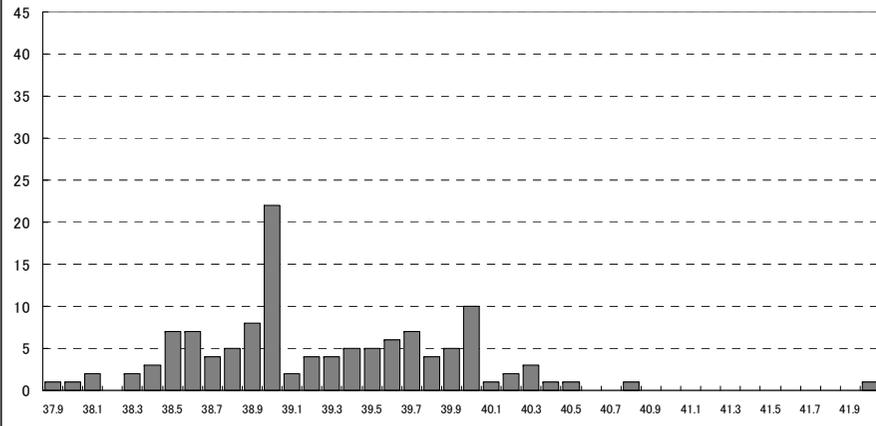
表3.発熱から異常行動発現までの
日数

発現日	重度		走り出し、飛び降りのみ	
	n	%	n	%
発熱後1日以内	25	33.33	14	35
2日目	37	49.33	19	47.5
3日目	11	14.67	6	15
4日目	2	2.67	1	2.5
	75	100	40	100

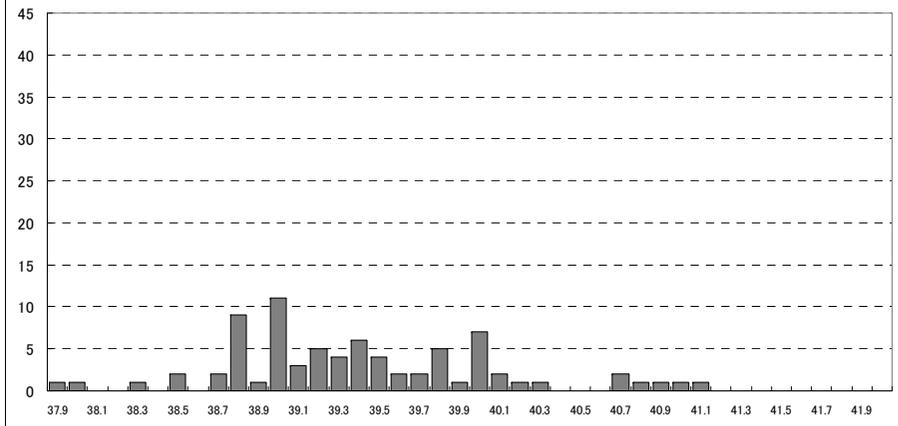
(2007／2008)

图7.最高体温

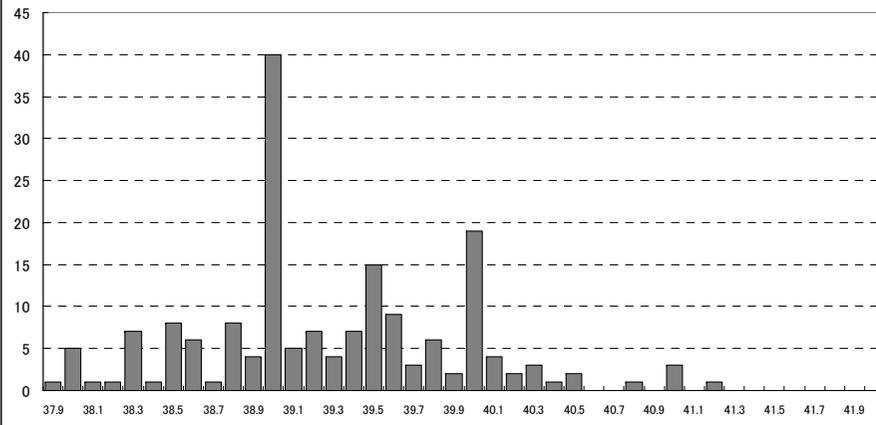
2006/2007 n=125 平均值39.24中央值39.0



2007/2008 n=77 平均值39.41中央值39.3



2008/2009 n=177 平均值39.28中央值39.2



2009/2010 n=256 平均值39.29 中央值39.2

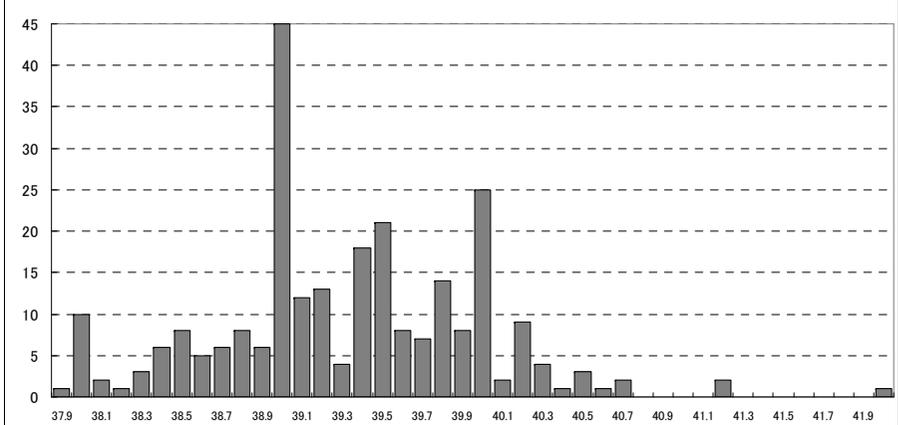


図8. インフルエンザ迅速診断キットの実施の有無

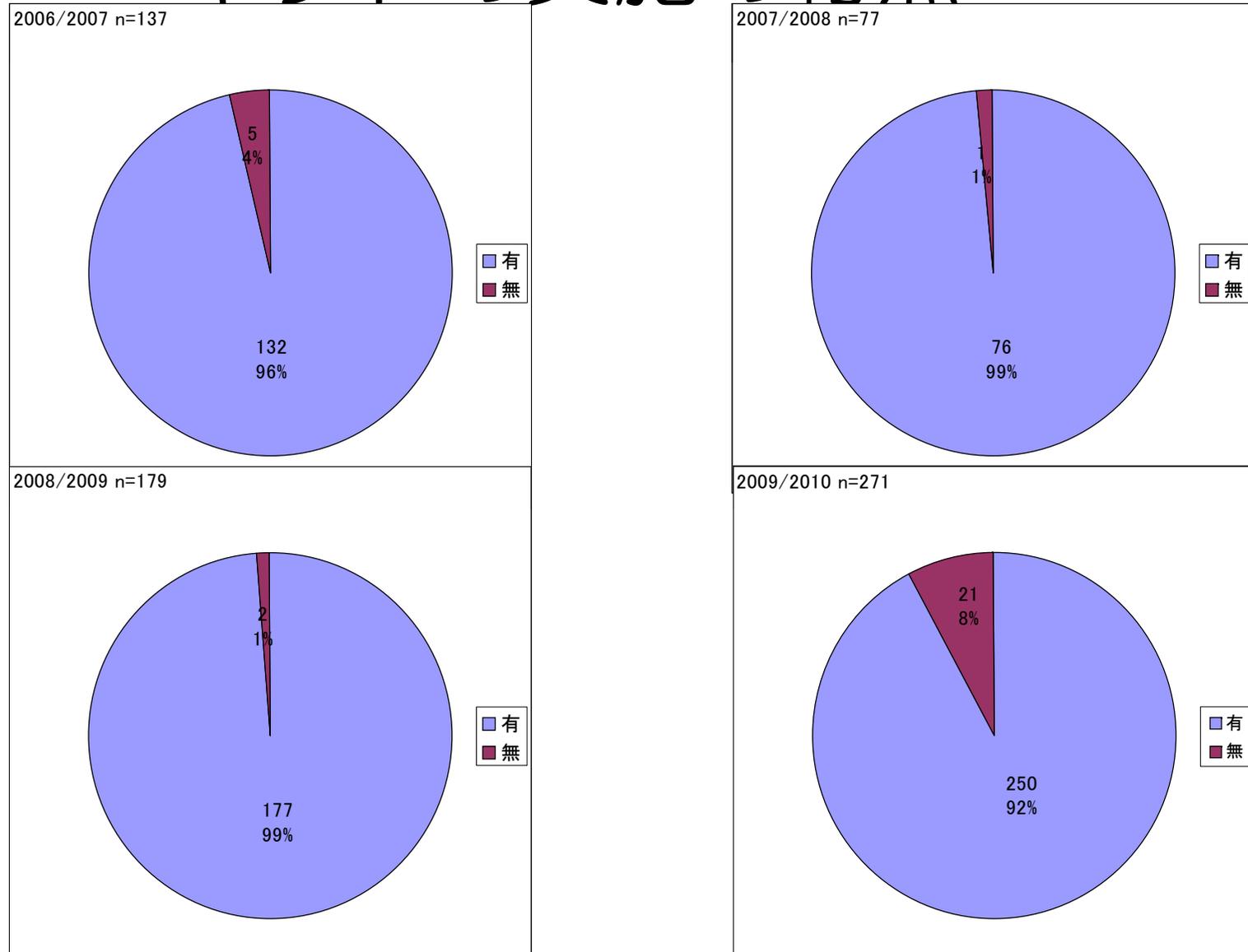


図9.迅速診断キットによる 検査結果

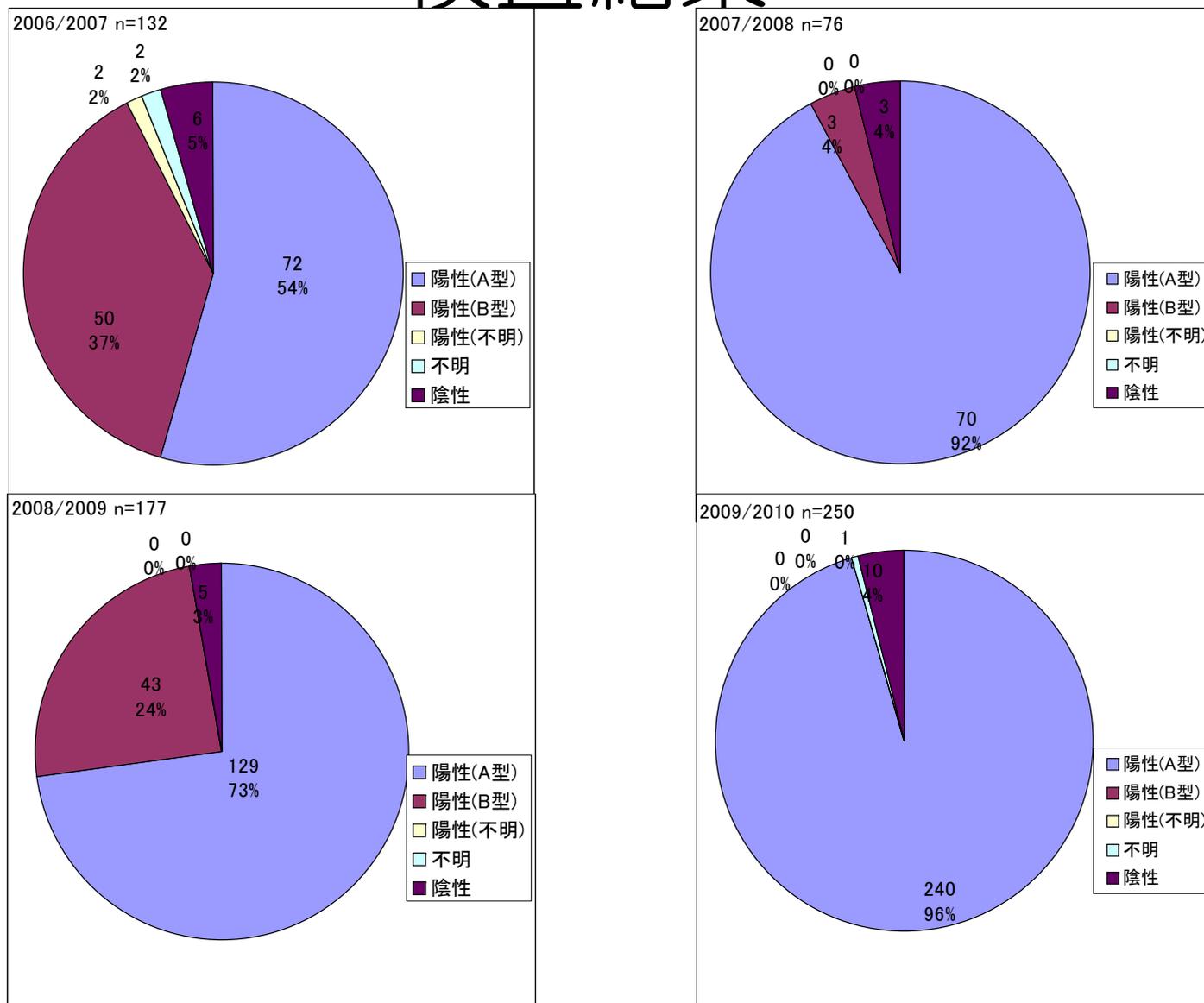


図10.異常行動と睡眠の関係

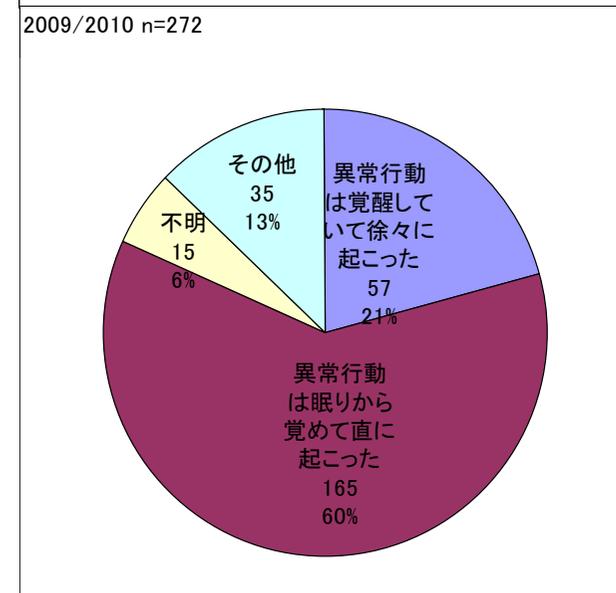
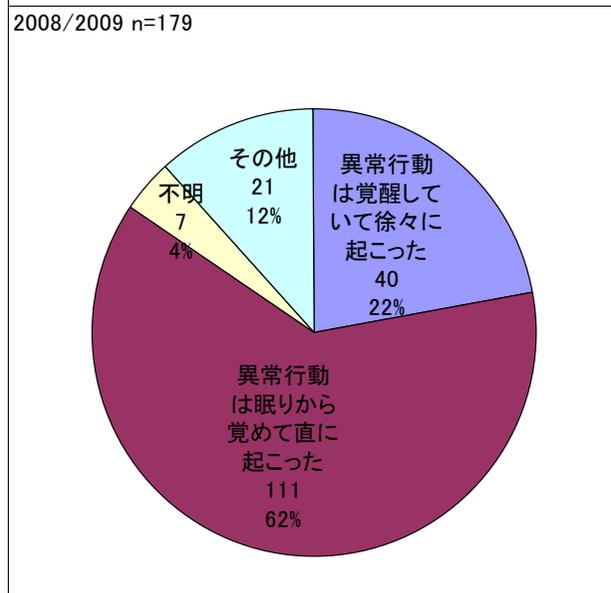
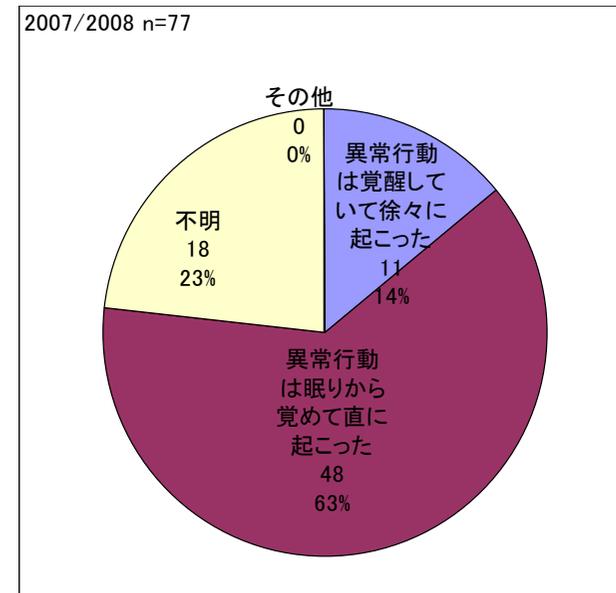
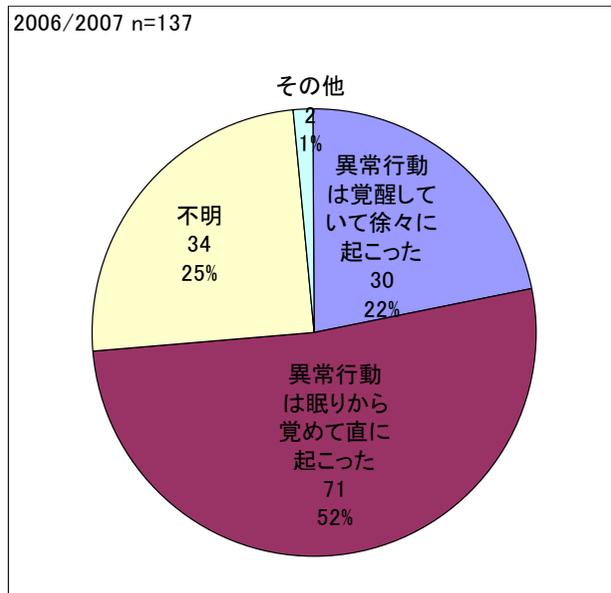
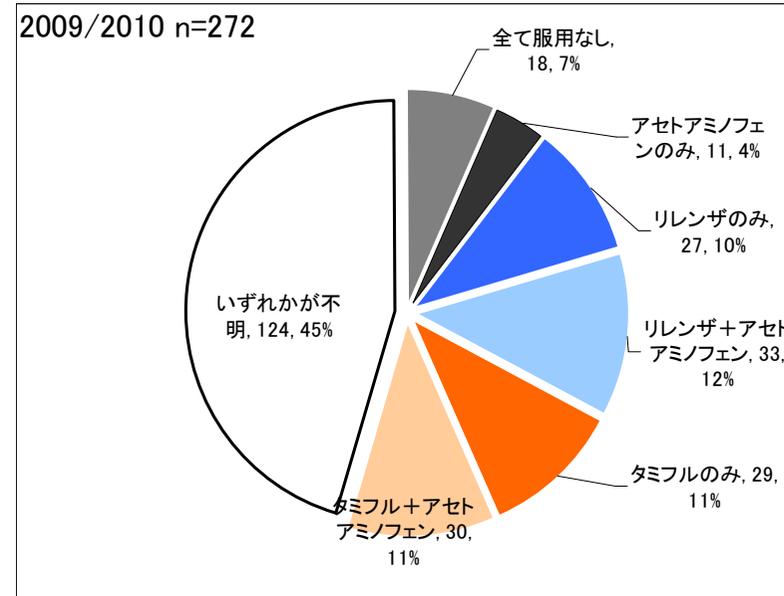
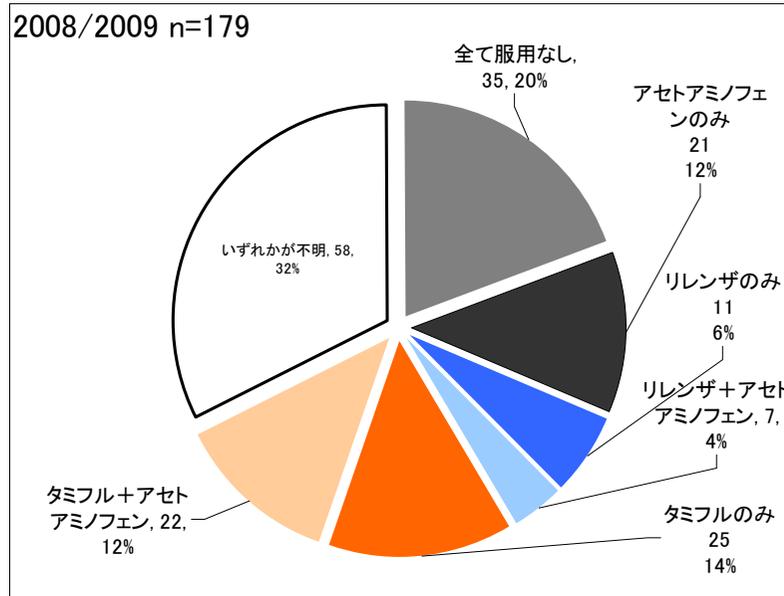
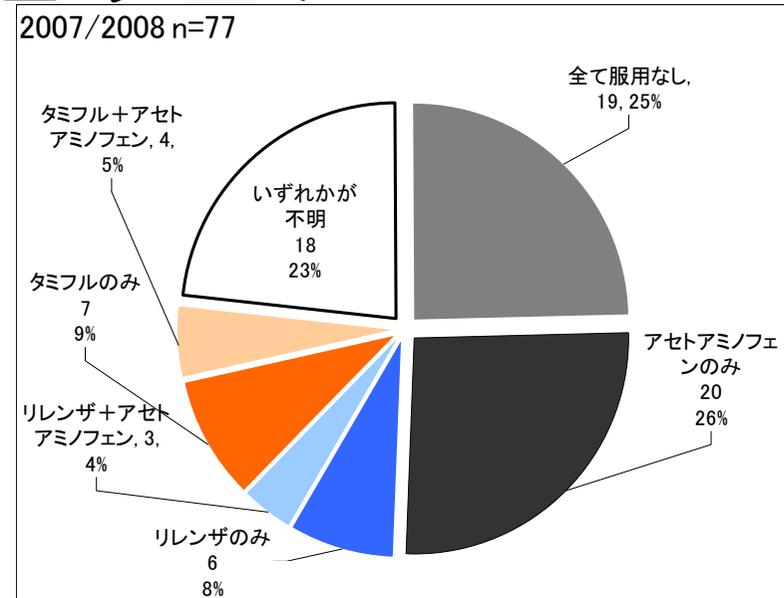
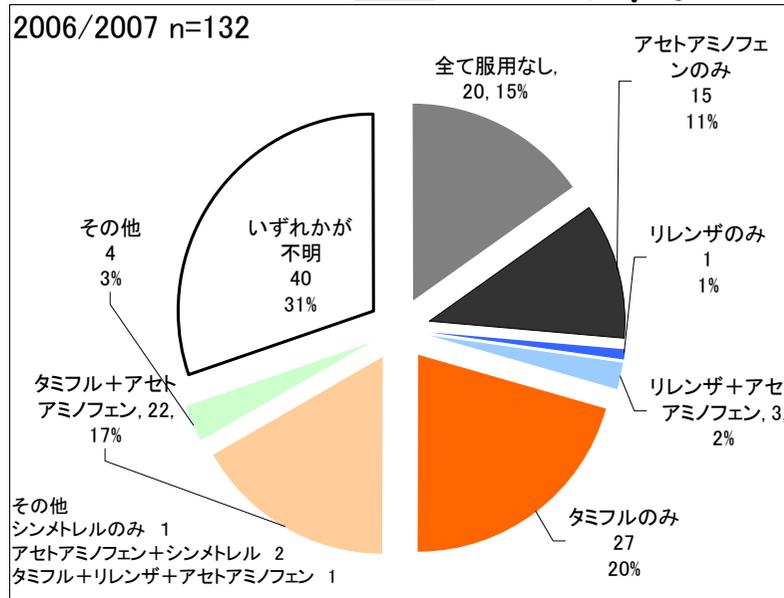
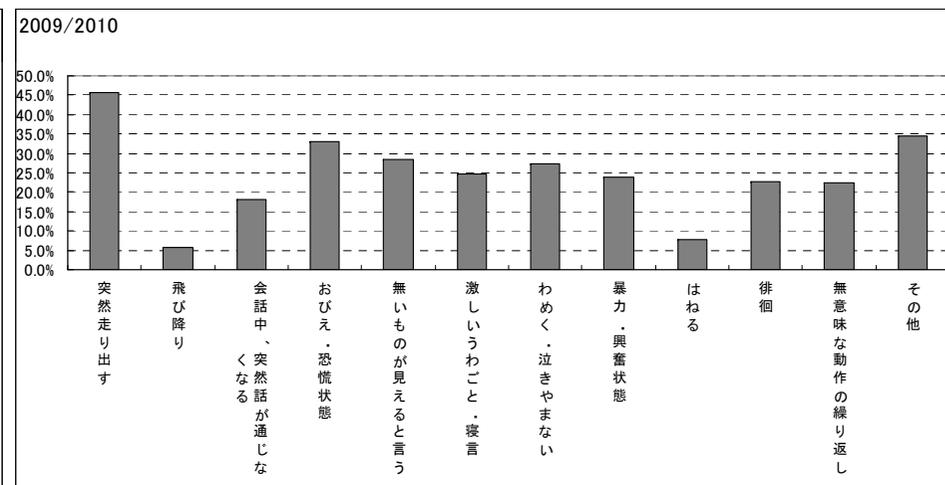
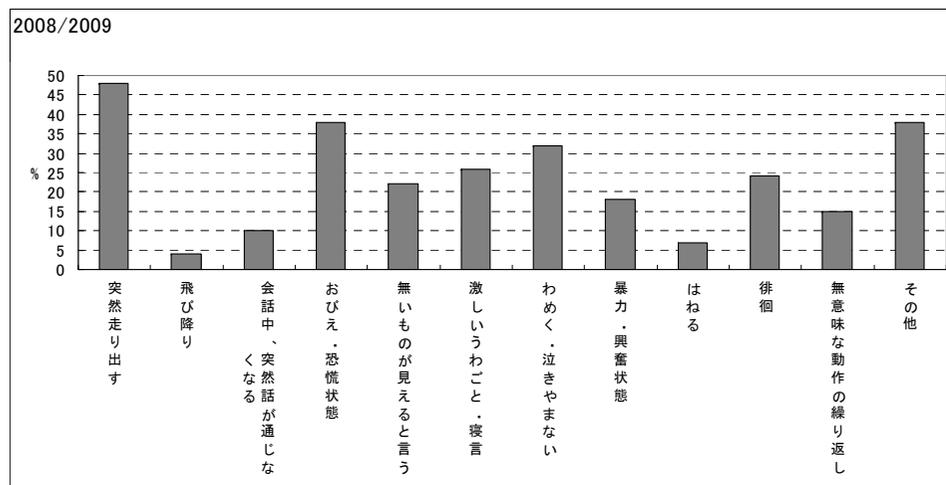
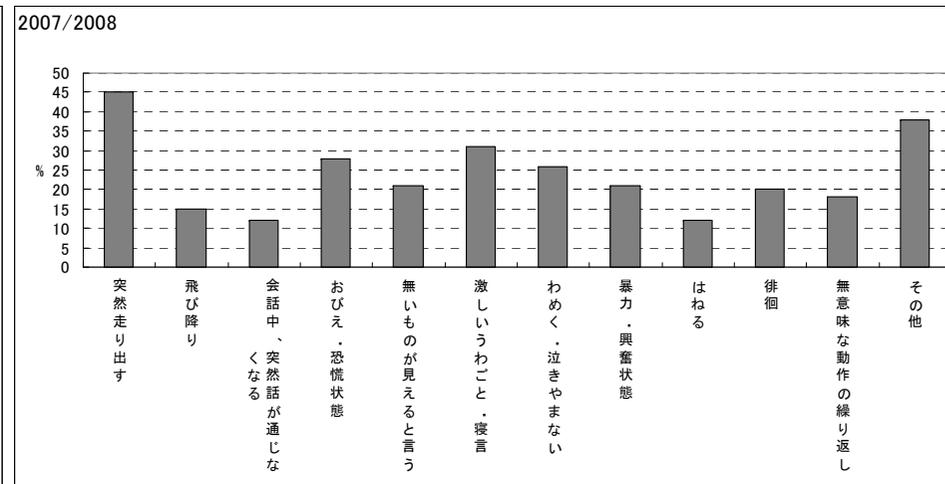
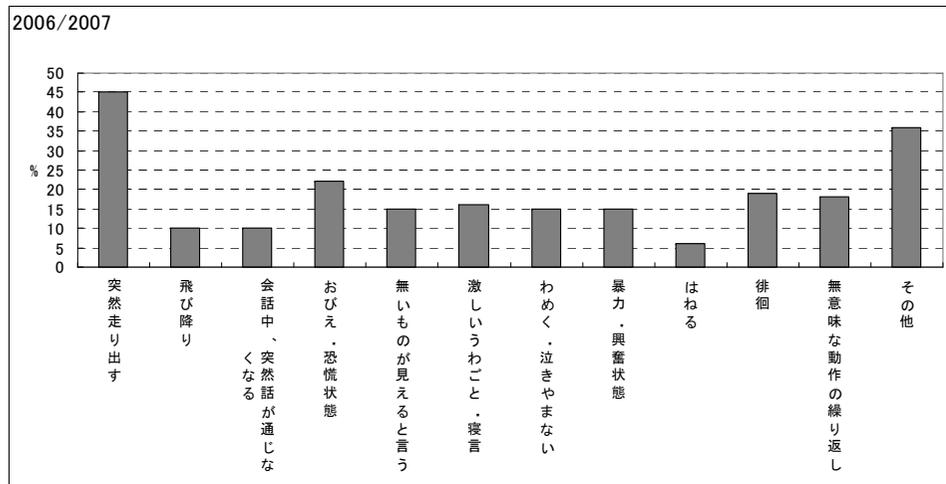


図11.薬の組み合わせ



注:タミフル、シンメトレル、リレンザ、アセトアミノフェンの4剤の服用有無が明らかな症例についての内訳。
4剤のうち一部薬剤処方有り症例でも、併用状況が不明な症例は「いずれかが不明」に分類。

図12.異常行動の分類(複数回答)



注:複数回答で、それぞれ割合で示しているため、合計は100%を超える。

突然走り出す・飛び降りのみ の分析

図13.患者の年齢

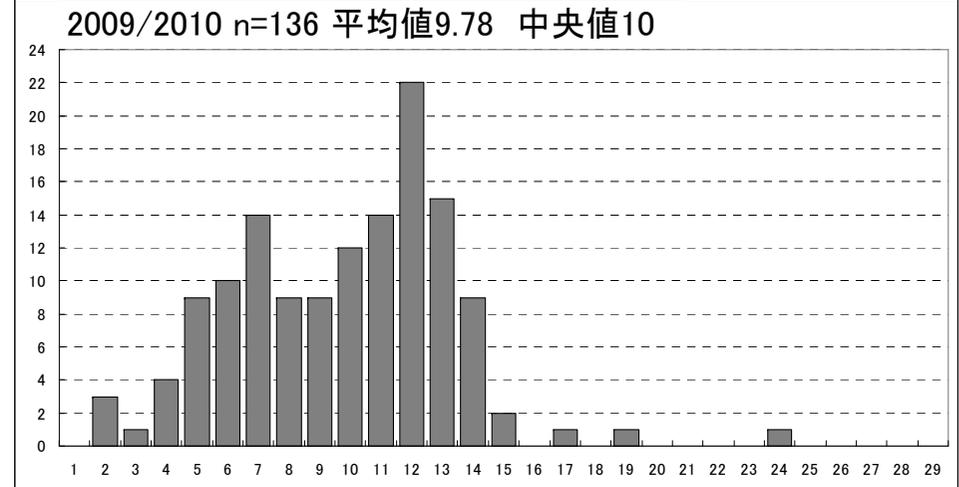
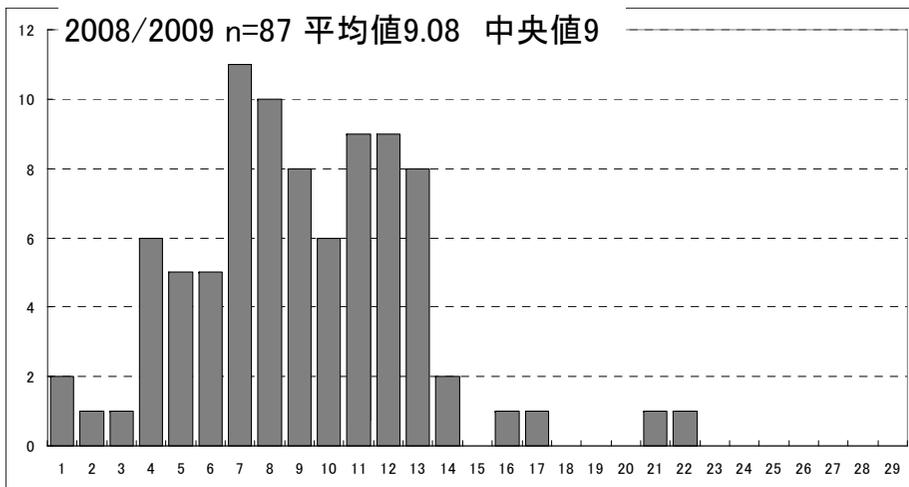
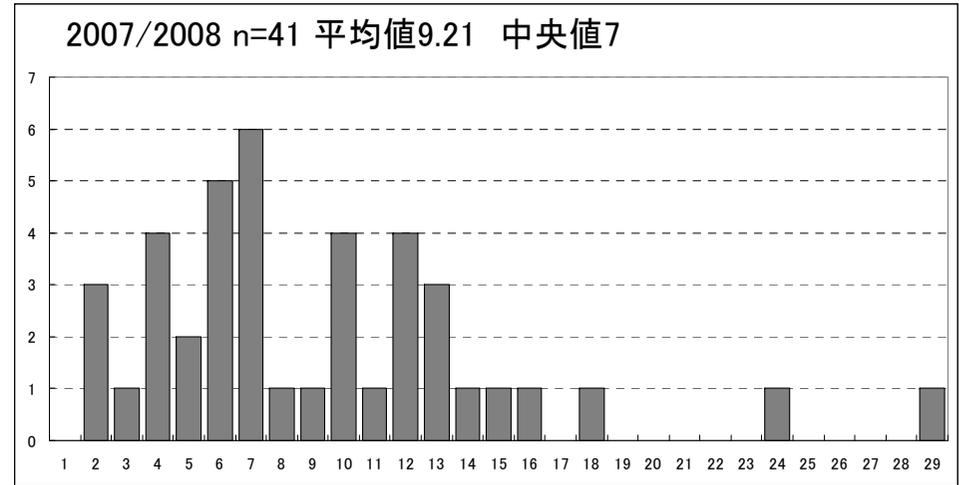
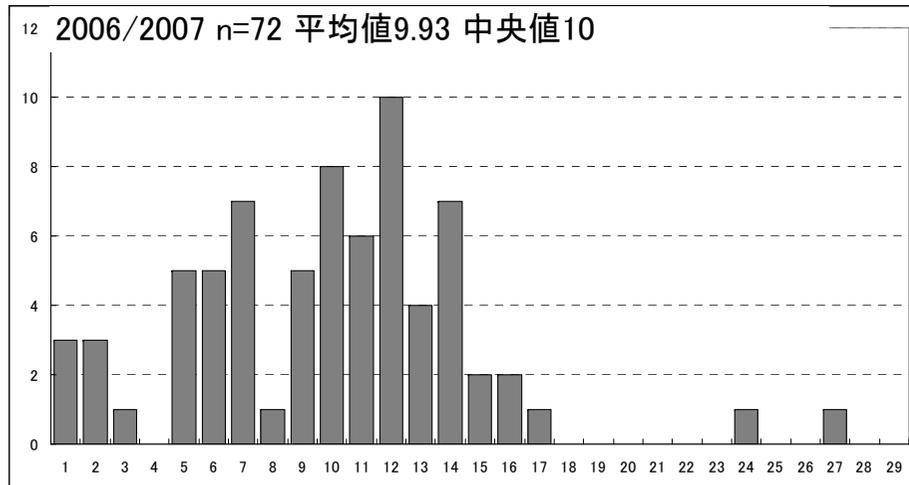


図14.患者の性別

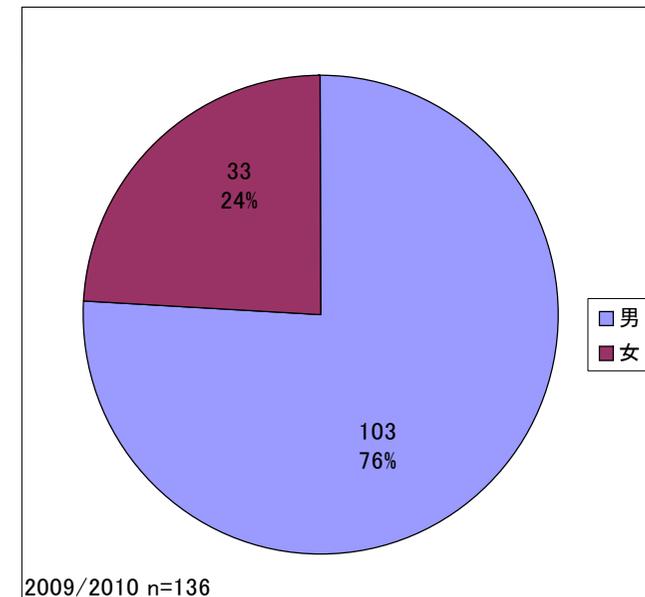
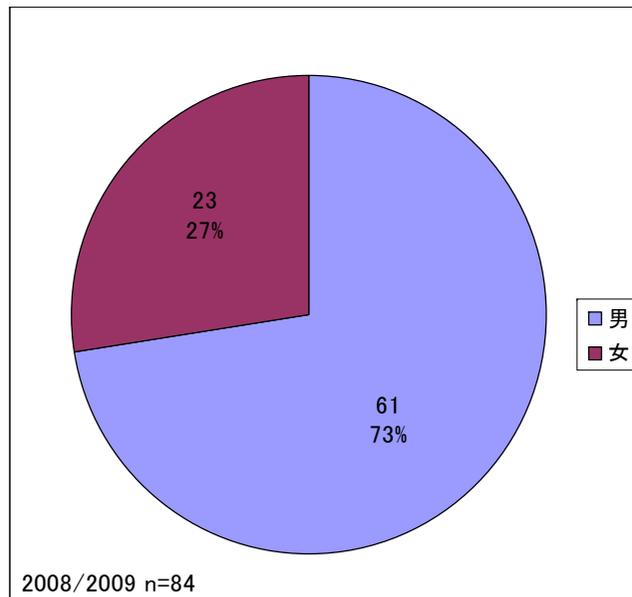
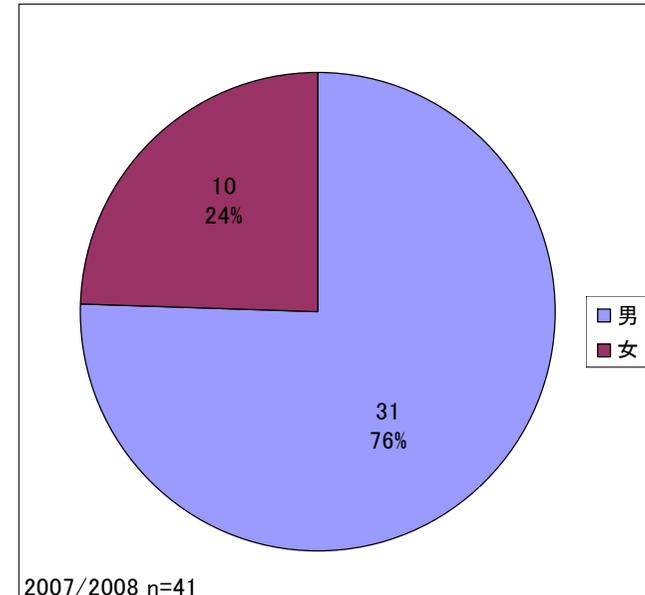
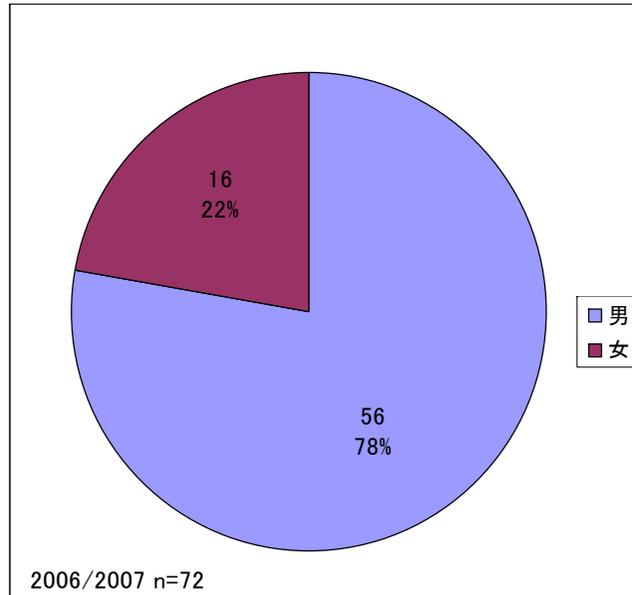
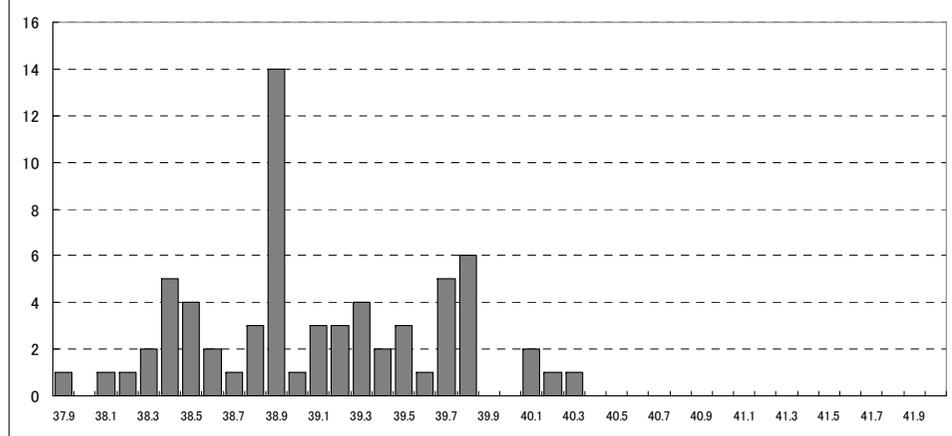
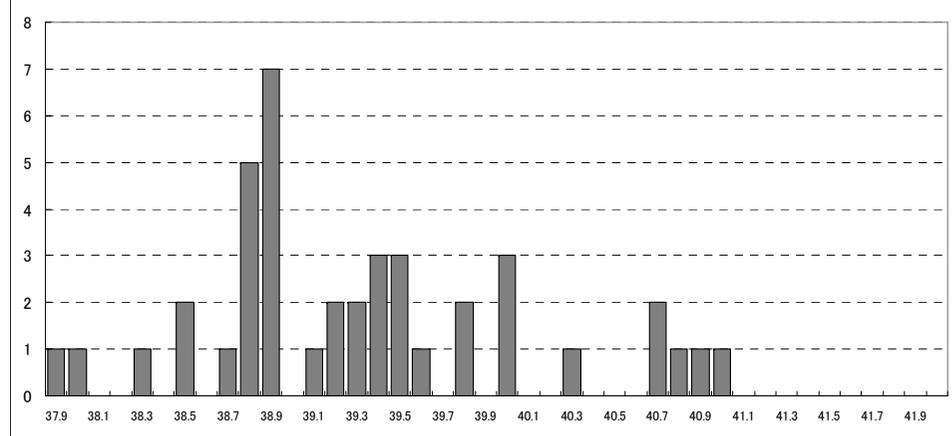


図15.最高体温

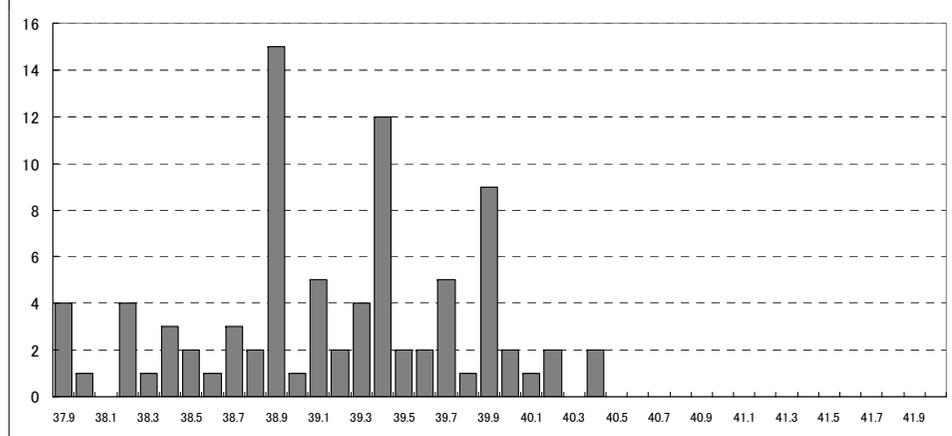
2006/2007 n=66 平均值39.24中央値39.0



2007/2008 n=41 平均值39.34中央値39.2



2008/2009 n=86 平均值39.26 中央値39.3



2009/2010 n=127 平均值39.21 中央値39.1

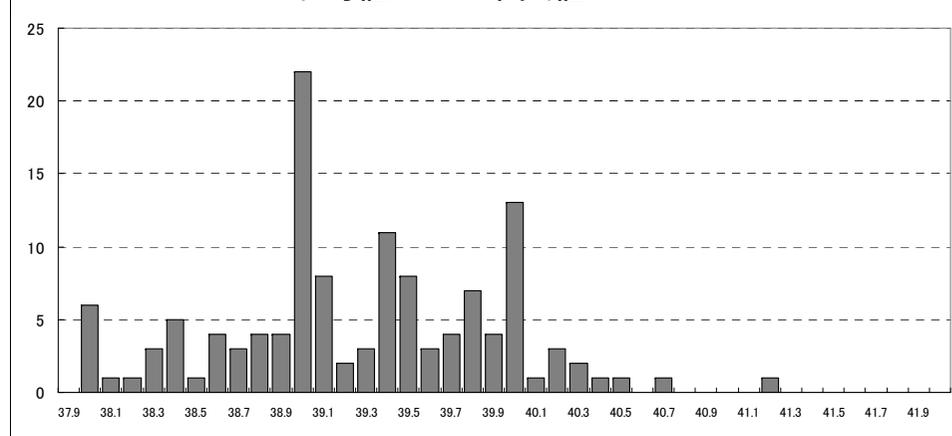


図20. インフルエンザ迅速診断キットの実施の有無

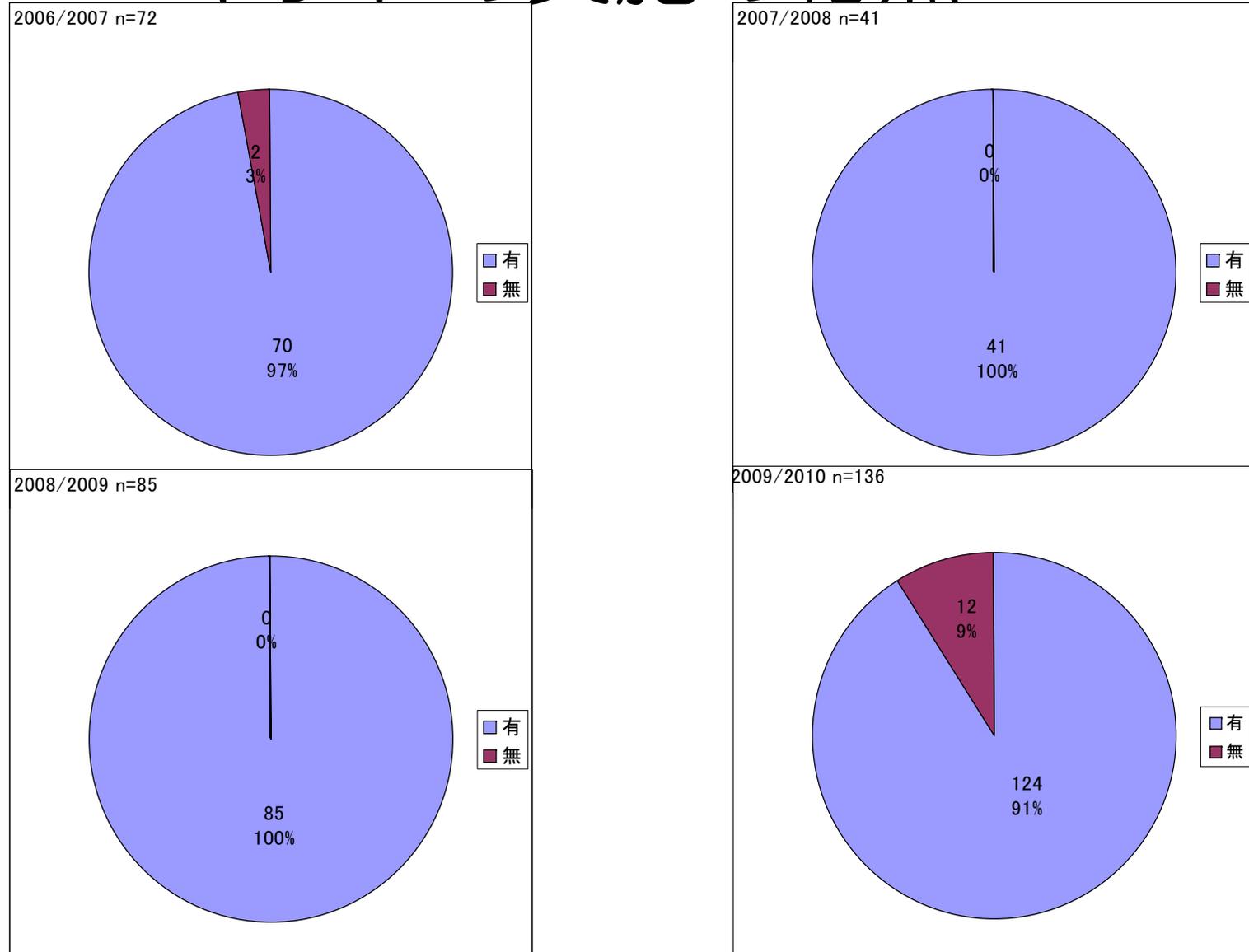


図21.迅速診断キットによる 検査結果

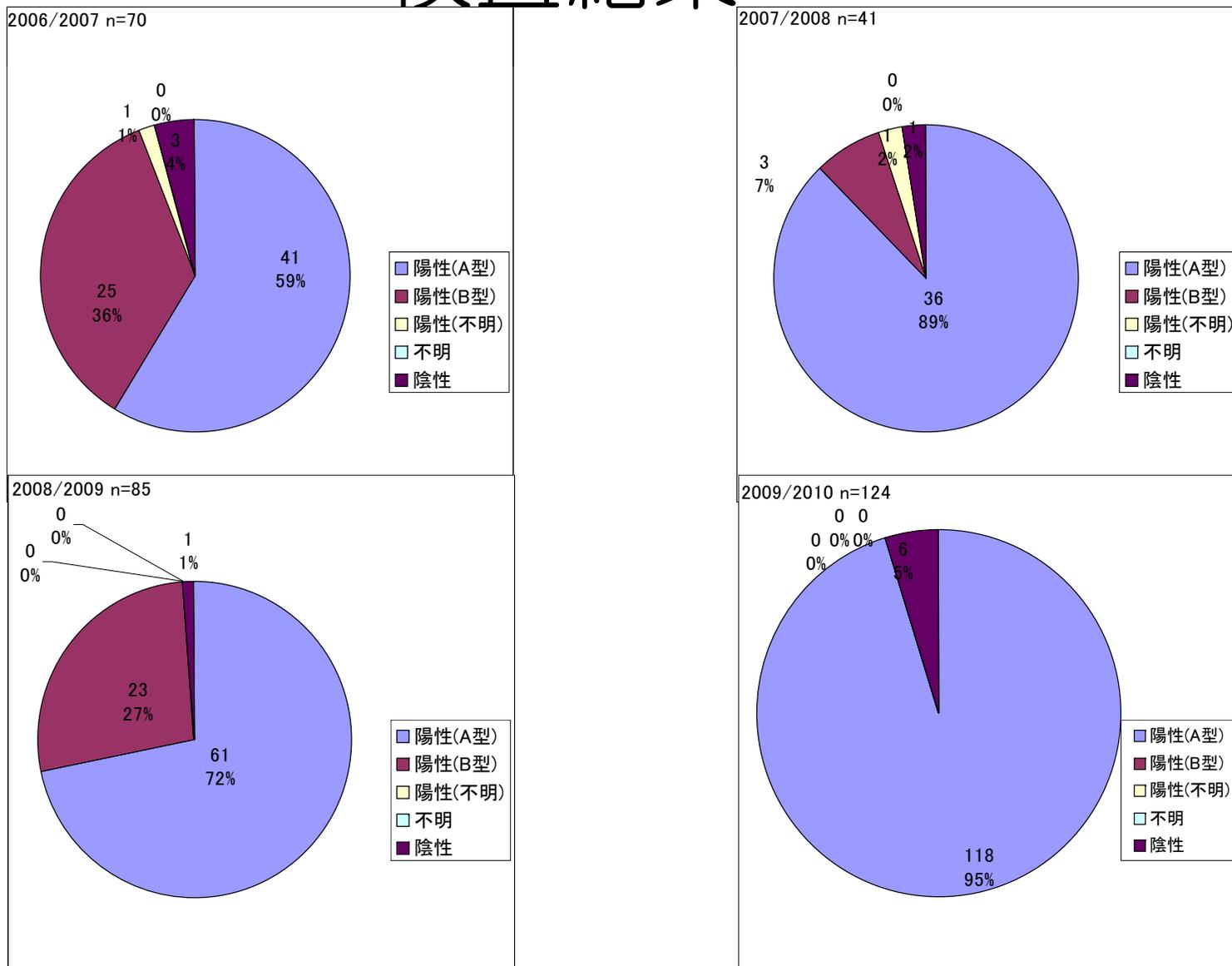


図22.薬の組み合わせ

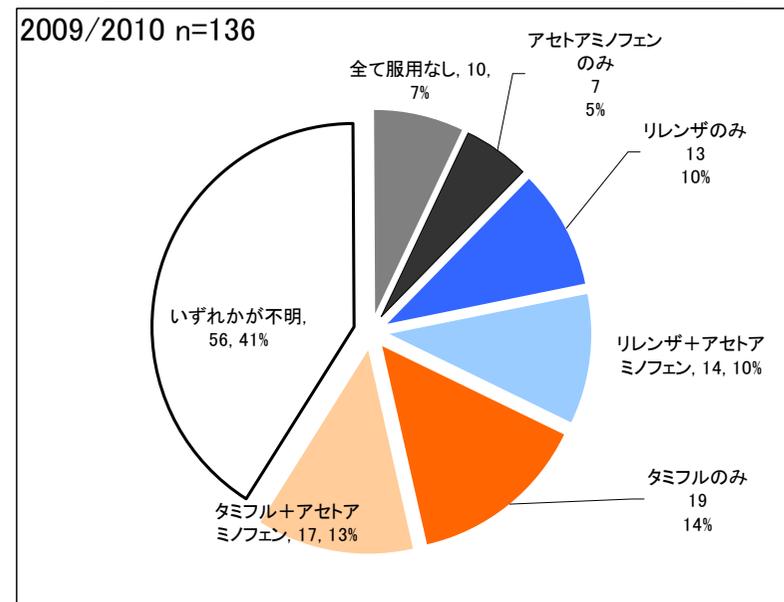
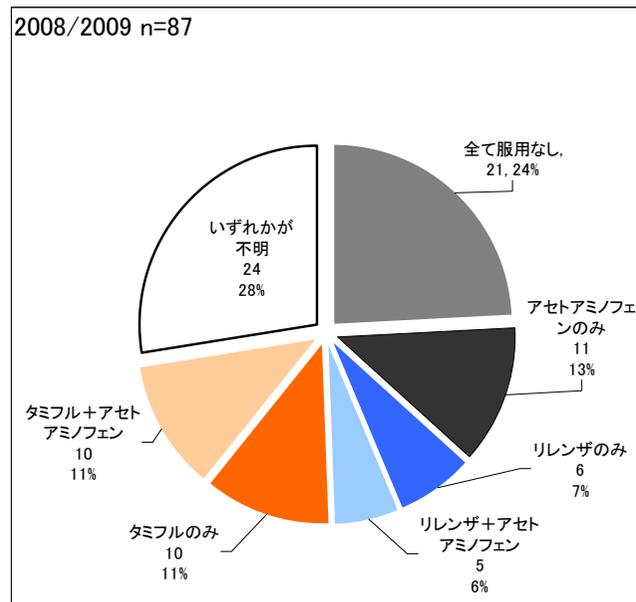
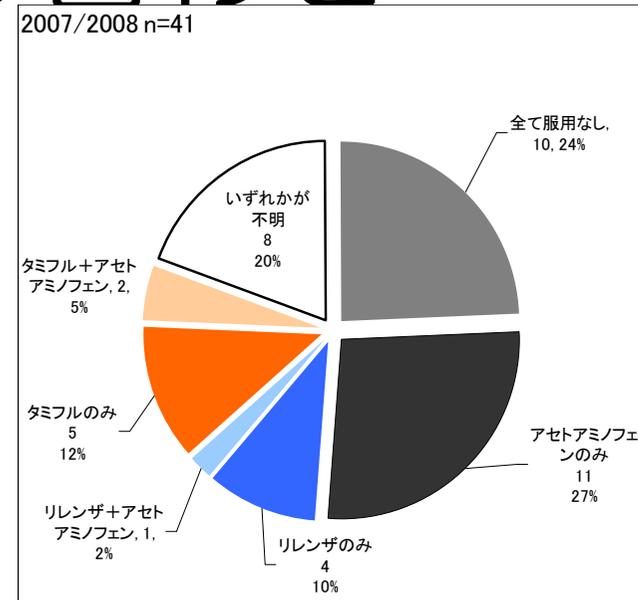
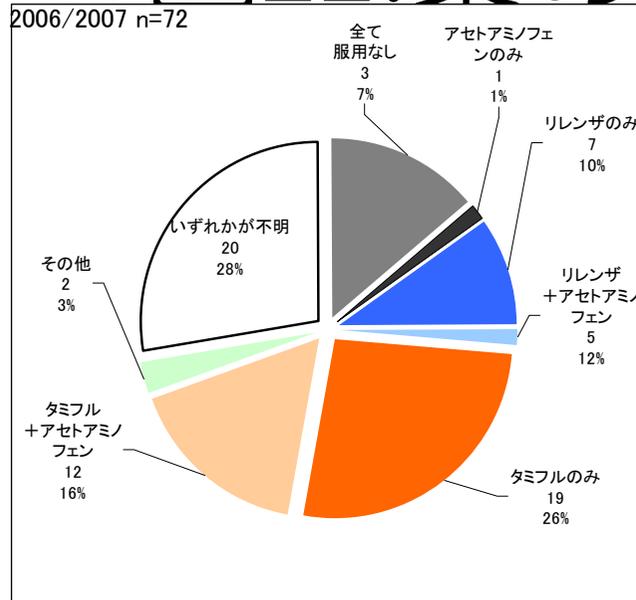
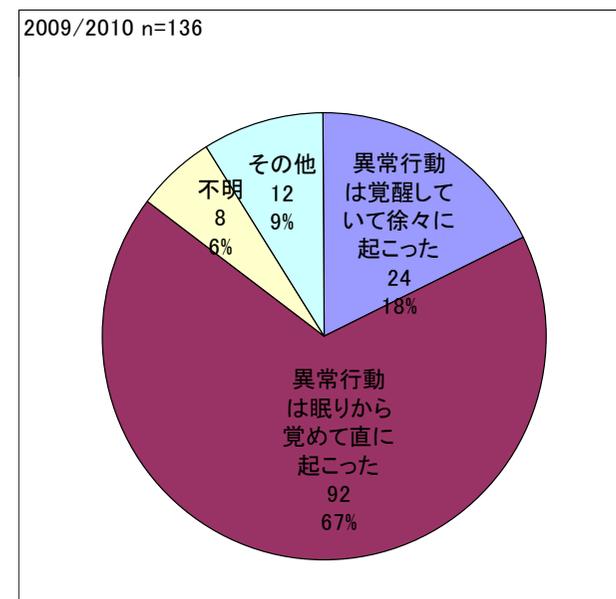
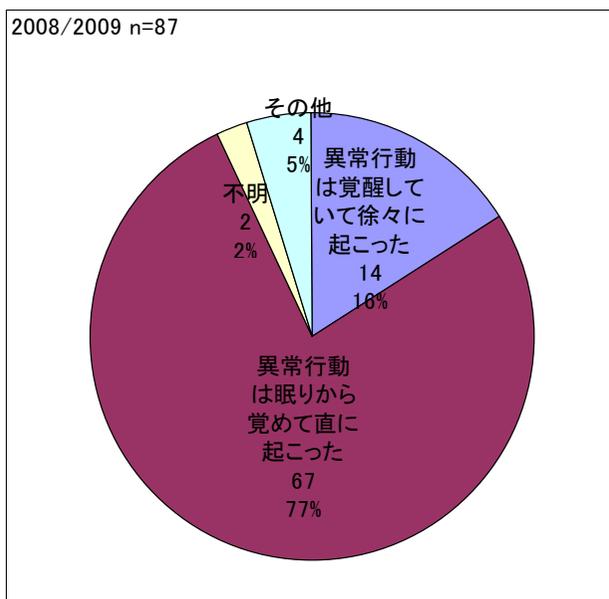
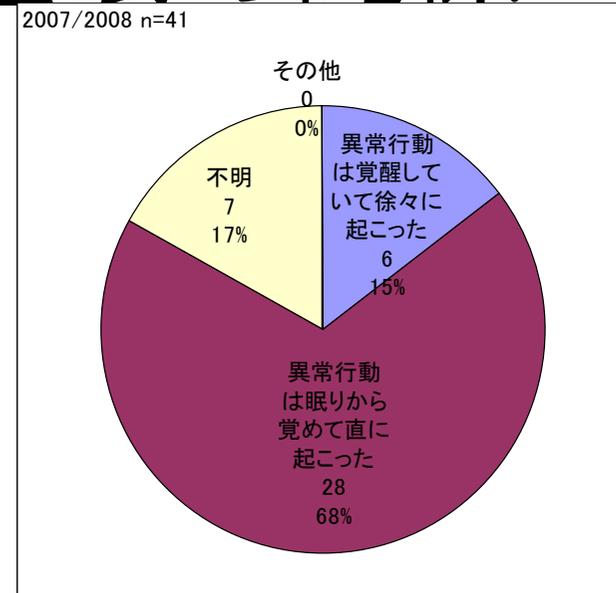
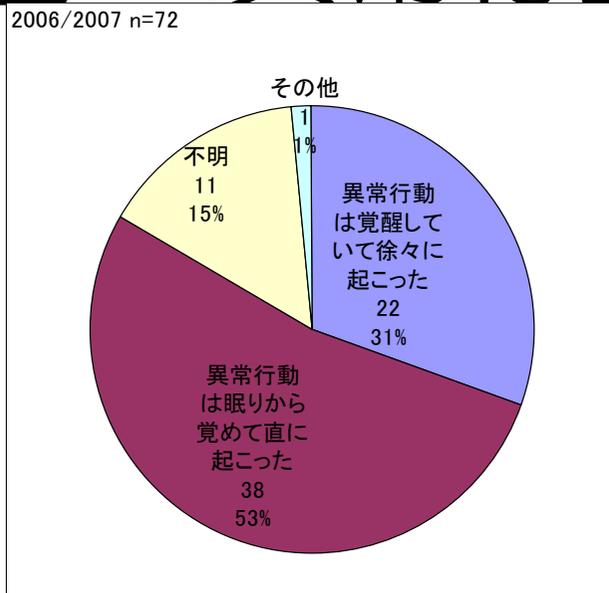


図21.異常行動と睡眠の関係



まとめ

- 新型インフルエンザの大きな流行に併せて、異常行動の報告も多かった。
- 重度の報告のピークは、新型インフルエンザのピークよりも4週間早かった。
- 異常行動の発生状況について、これまでの報告では、従来の季節性インフルエンザにおける異常行動の報告傾向と概ね類似しているが、新型インフルエンザ患者発生の状況に応じて年齢が若干高く11才が最頻値で、男性の方がやや多かった
- 薬剤の使用状況に関しては、10代へのタミフルの処方差し控え以降、相対的に、リレンザ服用例が増加していると思われ、両薬剤での報告割合はシーズンによって異なるが、2009-2010シーズンでは、リレンザ服用例での異常行動報告例が、重度異常行動全体でタミフル服用例と同程度、突然の走り出し、飛び降りなどでタミフルがやや多いという状況であった。このような状況からは、従来の季節性インフルエンザと同様に、抗ウイルス薬の種類、使用の有無と異常行動については、新型インフルエンザでも特定の関係に限られるものではないことが窺える。
- また、異常行動の報告内容には、飛び降りなど、結果として重大な事案が発生しかねない事案も従来同様に報告されている。

○以上のことから、新型インフルエンザに対しても、従来の季節性インフルエンザ同様に異常行動が起こり得るとして、従来の注意喚起を継続することが必要と考えられる。